

会報



第28号

編集・発行人 支部長 浅子逸男

一枚のポスターから

木谷 真紀子

「大橋毅彦先生のご発表はどのような内容ですか？」

昨年六月、研究室のドアに貼っていた関西支部春季大会のポスターをご覧になったN先生に尋ねられた。先生のご専門はブラジル移民。「鯉川筋の一番上に移民センター、一番先に神戸港があります。神戸からブラジルに行った人はほぼ全員鯉川筋を歩いているんですよ。大橋先生の題に『神戸鯉川筋』とあるので：「とおっしゃった。思わず「私も、ブラジルに親戚がいます」と申し上げた。私たち家族はお会いしたことがなく、親戚全体で縁故が途切れて二十年は経つ。しかし、次第にブラジルへの気持ちが高まり、彼の地の学会にエントリーをした。一方、N先生は、私の曾祖母の弟・竹中儀助氏がブラジル和歌山県人会の初代会長であることを突き止め、和歌山県で活動する中南米交流協会の代表をご紹介くださった。驚くべきことに、会では竹中氏の母校にブラジル国花イッペーを植樹する準備を進められていた。

その植樹式にご招待のうえ、現在の同県人会会長、谷口ジョゼ眞一郎氏をご紹介くださり、見事、親戚につながったのである。

今夏、私は生まれて初めてブラジルを訪れる。日本語ができない親戚とのコミュニケーションにも、全く不安はない。かつて本学に留学していたブラジル人学生が通訳を引き受けてくれているからである。

ふと考える。大橋先生の題に「鯉川筋」が含まれていなければ、私はどのように過ごしていたのだろうか、と。この一年で巡り逢った多くの方を知ることもなく、親戚との縁も途切れたままであり、地球の反対側の教え子ともSNSで関わるだけであった。

一枚のポスターは、少なくとも私の一年を変えた。司会の機会を与えてくださった関西支部の各位に「ブラジルでかけがえのない経験ができました」とご報告できるよう、今は眠い目をこすりながら、準備に励んでいる。

支部大会案内

二〇一八年度 秋季大会 於・花園大学（無聖館五階・無聖館ホール）

十一月十日（土） 午後一時～

【プログラム】

■開会の辞

花園大学学長

丹治 光浩

■講演

大正震災後、関西文芸の海洋体験

根川 幸男

辻 明寿

■研究発表

宮沢賢治「グスコープドリの伝記」論——雑誌『児童文学』が与えた視座——

服部 峰大

■閉会の辞

支部長 浅子 逸男

野上弥生子『台湾』の視座——日本人作家の視察と理蕃政策——

渡邊 ルリ

※総会終了後、学食「ふるーる」にて懇親会を開催します。奮ってご参加ください。

■研究発表

〔自由発表要旨〕

宮沢賢治「グスコープドロの伝記」論——雑誌『児童文学』が与えた視座——

服部 峰大

昭和七年三月、文教書院から発刊された雑誌『児童文学 第二冊』に掲載された宮沢賢治の「グスコープドロの伝記」は、「ありうべかりし賢治の自伝」と呼ばれ、「雨ニモマケズ」に代表される賢治の思想を重ねて読まれて来た。「グスコープドロの伝記」には、その前稿として「グスコンプドロの伝記」があり、この改稿により、主人公が自己中心的偉人から、他者の為の偉人に変更されたとの指摘が既になされている。

本発表では、ブドロの「笑い」を中心に、掲載誌である『児童文学』の編集方針が、本作の改稿にいかなる影響

を与えたのかについて考察したい。

清水正は、ブドリと百姓の断絶を指摘し、ブドロの自己認識を「(理想と使命)に燃える(立派な人間)」とし、その自己認識は「作者によっても保障されている」としている。しかし、作者はブドロの自己認識を肯定していたのだろうか。

確かにブドリと百姓の間に断絶は存在している。だが、ブドリは本当に、そのことに最後まで無自覚だったのか。改稿後、書き加えられた「楽しい五年間」、ブドリが死を決意する要因の一つとなる「笑い」に注目し、改稿前後を再検討することで、グスコープドロを批判的に捉える視点の存在を明らかにする。

では、なぜこのような改稿がなされたのか。掲載誌である雑誌『児童文学』は、「純粋童話、詩的童話」を合言葉に、子供向けの童話を批判していた。努力や修養を主題に据えた伝記物に注目が集まる中、「グスコープドロの伝記」には、それら既存の児童文学

を批判する読みが内在していたのである。

野上弥生子『台湾』の視座——
日本人作家の視察と理蕃政策

渡邊 ルリ

野上弥生子は一九三五年十月、始政四十年記念博覧会開催中の台湾を総督府政務長官夫人平塚茂子の招きで訪れ、紀行文『台湾』(『改造』一九三六・四〇五)『朝鮮・台湾・海南諸港』(一九四二・八)を発表した。総督府長官邸到着の翌朝、弥生子が原住民族を知るため全島一周を願ったことにより、総督府は新たなスケジュールを用意し、巴達岡・花蓮・大武・霧社等での原住民との面会を設定した。霧社事件から五年後、埔里で整列した「霧社蕃」の人々を見せられた弥生子は、事件の場所や生活の見学を新たに求め、官憲側に味方したパーラン社を

訪問している。

原住民に関する弥生子の見解と想像は、官憲側から与えられた情報をもとに展開するが、その発言はさらに、同行した文教局の河崎寛康によって批判される（『台湾時報』一九三六・二）。

弥生子の言説には無自覚的な原住民族への優越意識を含むエキゾティシズムが見られるが、その一方で弥生子は、芸術と教育について自由主義的感覚を持ち、原住民の文化保存、経済生活の変化を「正しく」導く必要、内地人の「偉さ」を植え付ける国粹主義的教育への懸念に加え、警察による原住民教育の継続を疑問視する見解を発言していた。これは理蕃政策に沿って官憲が弥生子の視察に期待したものと、逆行していたのである。

本発表では、『台湾日日新報』『台湾愛国婦人新報』等を参照しつつ、『台湾』における弥生子の視座が、理蕃政策の影響下にありつつそれを超える要素を持つことを検証する。それは第一に、弥生子の文化・教育に対する感性

であり、第二に、原住民知識人の描写が、語り手（弥生子）の優越意識による人間洞察の限界を示しながらも、その複雑な内面を読者に感知させる点である。

「龍山寺の曹老人」論——日本統治期台湾における探偵小説と台湾民俗保存活動——

辻 明寿

金関丈夫（一八九七～一九八三）は台北医学専門学校助教授として来台し、終戦まで台北帝国大学医学部教授をつとめた。一九四一年に池田敏雄等と共に『民俗台湾』を創刊、台湾の民俗を研究する傍ら、台湾で最初の本格的探偵小説『船中の殺人』や「龍山寺の曹老人シリーズ」等を日本語で執筆した。

「龍山寺の曹老人シリーズ」に関する先行研究では金関が探偵小説というジャンルの特性から台湾人に対する教

育的な意味をすべり込ませているという指摘や、曹老人の日本帝国の言説に寄り添った説教は、作者である金関が発表媒体である『台湾公論』のテイストを意識したものだだったという指摘がある。

日中戦争勃発後、台湾総督府は皇民化運動を開始し、台湾の既存の宗教に対する多くの改革を行い、台湾独自の宗教儀式は抑圧されていった。龍山寺も曹洞宗の末寺となり、教育事業等を通じて台湾民衆の皇民化をすすめていた。

しかし、「龍山寺の曹老人シリーズ」では日本帝国が推進する皇民化運動は描かれず、当時抑圧されていたはずの台湾独自の宗教儀式が描かれている。金関は『民俗台湾』において民藝紹介をしつつ、同時に目に見えない文化の保存の重要性を訴え、「人間の気風の良さ」の保存の重要性を説いていた。「龍山寺の曹老人シリーズ」において、民藝紹介では描けなかった当時の台湾人の信仰の形式や気風を小説という形

式を用いて保存しようとしていたと考
えられる。

■講演

大正震災後、関西文芸の海洋体
験

根川 幸男

〈講師プロフィール〉

一九六三年大阪府生まれ。サンパ
ウロ大学哲学・文学・人間科学部大
学院修了。博士（学術）。ブラジリア
大学文学部外国語・翻訳学科准教授
を経て、現在、国際日本文化研究セ
ンター機関研究員。主要著書：『ブ
ラジル日系移民の教育史』（みすず
書房、二〇一六）、『越境と連動の日
系移民教育史―複数文化体験の視座』
（ミネルヴァ書房、二〇一六、井上章
一との共編著）、『Cinqüentenário da
Presença Nipo-Brasileira em Brasília
(FEANBRA, 2008, 共著)』その他。

支部大会報告 二〇一八年度 春季大会

六月二日（土） 於・京都大学 吉田キャンパス

■大会発表を終えて

〔シンポジウム「更新される〈明治〉」

発表を終えて（芥川龍之介の江
戸と明治——奠都五十年言説の
中で——）

奥野 久美子

大会後の月曜日、共通教育の授業で
芥川の「舞踏会」を扱うにあたり、三
島由紀夫が「舞踏会」を「芥川の長所
ばかりの出たもの」と称賛している文
章を紹介した（『鹿鳴館』について）
／「大阪毎日新聞」昭和三十一年十二
月四日）。その中で三島はこうも述べ
る。

「終戦後の占領時代は、ちよつと鹿鳴
館時代に似ていた。堀田善衛氏の小説

には、GHQと関係のあった貴婦人た
ちが登場するが、もつとも現代のほう
は、階級の没落も伴って卑しげであつ
て、鹿鳴館時代のように、外人に阿諛
を呈しながらも、一方新興国家のエネ
ルギーと、古い封建的矜持とをふたつ
ながらそなえていたのとは、比べもの
にならない。」

三島は開化期に「新興国家のエネル
ギーと、古い封建的矜持」の「美しい
調和」（芥川「開化の良人」）を見てい
た。似ているが、比べものにならない
—シンポジウムのテーマ「更新される
〈明治〉」の、「更新される」の意味を
私なりに考えるには、このような点に
もつと注意を傾けるべきであつたと思
う。

発表では、「開化の良人」と奠都五
十年との関わりについて考えたが、そ

の中であらためて、大正八年、奠都五十年の東京市行事と重なる時期に、芥川の実父、長州出身で御橋隊に加わった新原敏三が死去したことの意味を思った。父の死で芥川の明治も終わった、そこから開化期ものを読む可能性もある。

当日は落着いて考えられなかったが、今ふり返り、討議では、趣旨文にもあった司馬遼太郎「坂の上の雲」について、また、企画の先生方との打合せ会で話題になった、明治百（百五十）年、オリンピック、万博、というイベントが順序こそ違え続くことが、五十年前と今に共通していること、これらを話題にできなかったことが悔やまれた。会場からのご指摘とも一部異なるが、坂を上った先に希望がある、といった思想はもはやなく、人口も街も縮小し坂を下っている。上り方を顧みて下り方に思いを致すこともできるだろう。

ただただ場違いな私であったが、ご登壇の先生方、企画の先生方と準備から大会までを共有でき、また当日多く

の方々にご来場いただきましたこと、深く感謝いたします。

明治維新一五〇年記念の意味

内藤 由直

今回のシンポジウムは、五〇年・六〇年・一〇〇年の節目ごとに提起された明治再検討の言説を横並びにして、過去を問い直す試みに賭けられていた同時代的意義を詳らかにしたものであった。四名の報告を敢えて共約するならば、明治を振り返り記念する行為は、現在を理想的な形で、過去から将来へと繋がる一國史のなかに位置づけるためであったと言うことができるだろう。全体討議において、では今、明治維新一五〇年を問う意味はどこにあるのかという質問が寄せられた。「更新される（明治）」を検討するならば当然、そこまで考察を進める必要があったが、私の報告ではその点を十分に深められなかった。当日はうまく応答できなかったため、シンポジウムを

終えて考えたことを以下に記してみた。

質問は、発展史観を根底に据える近代化の観念が無効となった現在の日本において、なお近代的進歩の夢を帰郷させようとする明治一五〇年記念の意味を問うものであった。確かに、ポストモダンとグローバリゼーションがそれらのインパクトを見失うほど常態化した今日において、国家主義的な近代を再起動させようとする思惑は滑稽でしかあり得ない。ゆえに、明治一五〇年を記念することには意味などないと言える。けれども、それを滑稽なものと判断することができるのは、官製の再・近代化の観念が虚構ではないことを、私たちが常に既に知っているからである。それが特権的な学知であるのか、広く共有された普遍的認識なのかどうかは、直ちに評価することが難しい。

それよりも、その内実の空疎さを利用して、そこへ別種の意味が補填されてしまう事態にこそ注意を向ける必要があると思われる。例えば、一連の明

治一五〇年記念行事に繋がる形で、天皇在位三〇周年記念が組み込まれてくることが予想される。また、竹内好が「明治維新百年祭カンパニア」を惹起したのは一〇〇周年が来る八年前だったが、今から七年後には昭和改元一〇〇周年がやってくる。これが、昭和維新百年記念祭となる可能性はないとは言えない。現在の明治一五〇年記念を将来の昭和一〇〇年記念への布石と捉え、忘れ去られた大正一〇〇年をも合わせて思い起こせば、そこには強健な指導者としての天皇イメージが連続していく未来が想像される。その意味で、二〇一八年の現在を、近代国家イデオロギーの再生産装置として在る「象徴」を将来へ継承していく結節点として、評価することが可能となる時期が来るのではないかと考えた。

かつて戸坂潤は、どういう精神主義の体系が出来ようと、それは我々にとつてどうでもいいことであり、さらに特定の国民にしか理解できないように出来ている哲学や理論は例外なくニセ物であると批判した（『日本イデオ

ロギー論』白揚社 一九三五年）。明治維新一五〇年記念など、私にとつては全くどうでもいいことであり、偽物である。しかし、戸坂はそのどうでもいい偽物に殺されたのだということ想起すれば、眼前の状況を批判的に認識する眼差しだけは常に保持していたと思わずにはいられない。今回の研究発表とシンポジウムは、そのことを改めて強く記念するものとなった。

発表を終えて

有元 伸子

大会の特集から一ヶ月が過ぎた。当日の資料を見直しながら、登壇記とは、ようやくできたかさぶたを自らはがして傷口をまじまじと眺めるような行為であることだなあ、と思いつつ、せっかく頂戴した機会である。観察した後は、次の段階につなげていきたい。

「三島由紀夫がまなざす明治——政治とエロスのあわい」と題する発表で

行ったのは、明治百年にあたる一九六八年前後の「明治」に関する三島の言動から、国体や政治をめぐる問題系と身体的快楽・エロスとの結合・連続を考察し、再評価することであった。

三島が毎日新聞社主催の明治百年記念演劇脚本公募の審査員として選考・推挙した作品や、明治百年記念芸術祭のために文化庁から委嘱されたバレエ脚本「ミランダ」の生成過程に、クイアな要素が沈潜していることの指摘など、一定の成果はあったように思う。昭和神風連を扱った「奔馬」や、晩年の三島の西郷隆盛への傾斜についても、高橋陸郎の三島観や出雲まろうの映画「憂国」解釈などを援用しつつ、政治とエロスの側面から読み直した。ただ、近代以降の西郷受容言説を検討した先学を参照することで議論を同時代へ開こうと努力はしたものの、全体として三島論の枠内にとどまりがちであった。また、「明治一五〇年」とされる現在への接続の視点も甘かったように思う。個人発表とシンポジウムにおける質疑の際にも、三島の肉体と国家の関係を問いつつ、上述の点を指

摘いただいた。

さらに、シンポの終了後に受け取って帰広しながら拝読した質問用紙には、私宛に、国家とエロスに関する六〇年代の左派の言説空間や『奔馬』の読解、公的な場にクィアなセクシュアリティを導入することと西郷隆盛顕彰言説との関係、身体・ジェンダーの導入と維新史の更新についてなど、重要なご教示や考察上の脈が含まれていた。今後、論文化していく際に参照させていただきたい。

なお、今回のシンポジウムの一ヶ月前、五月の連休のさなかに意見交換会が開かれて、発表者・司会者・企画の運営委員の一〇名ほどが一堂に会して、半日たっぷり討議を行った。フレンドリーかつ実り多い集いで、企画実施に懸ける運営の皆様の熱意に感銘を受けました。

関西支部の皆様には貴重な機会を与えてくださり、まことにありがとうございます。重ねて感謝申し上げます。

明治維新一五〇年のシンポに参加して

高木 博志

このたびシンポジウム「更新される〈明治〉」において、「明治維新と五〇年、六〇年の記憶と顕彰——一九一七年、一九二八年の政治文化」の報告をさせていただいた。

当日の討論や、準備会のなかで考えたことを、私の報告と関わって二点補足したい。

一つは、近代文学と関わりの深い、江戸文化への憧憬や、江戸時代をどうみるのか、という問題である。実は、明治二年（一八八九）の大日本帝国憲法発布と、それにともなう「大赦」によって、はじめて江戸幕府や江戸の文化を自由に語ることができた点である。会津若松の飯盛山の白虎隊の墓が整備され、竹橋事件の「旧近衛鎮台砲兵之墓」が顕彰され、西郷隆盛の生家趾に碑が建つのも、この「大赦」が契機であった。明治三〇～四〇年代の戸川残花や三越百貨店の「江戸趣味」の

展開もここが起点となる（高木博志「郷土愛」と〈愛国心〉をつなぐもの」『歴史評論』六五九号、二〇〇五年）。明治一四年（一八八一）で人口比五・三％の土族が、全国の官職の約四〇％を占め、約三万人の土族が教師であった（園田英弘『西欧化の構造』思文閣出版、一九九三年）。文化や学問の担い手として、土族の割合は全国で高かった。帝都東京における江戸幕府や「賊軍」とされた東北地方における旧藩にたいする顕彰活動において、旧土族や幕府関係者が果たす役割は大きかった。

こうした問題を、明治・大正の文学研究から教えていただければ幸いである。

もう一つは、私がかつて前田愛の『近代読者の成立』（有精堂、一九七三年）から刺激をうけたのが、作品論ではなく、読者や社会的な受容や消費のされ方の問題であった。

明治二三～二五年（一八九〇～九二）の岡倉天心が東京美術学校で「日本美術史」を講義したからといって、

■大会印象記

シンポジウム・前半

澤西 祐典

二〇一八年度春季大会が、六月二日、京都大学にて開催された。

正期以降になって「社会」の登場が指摘される。明治中期までに制度化された御真影や教育勅語、あるいは君が代斉唱が、小学校で定式化され広がるのも、やはり昭和戦前期なのである（籠谷次郎『近代日本における教育と国家の思想』阿吽社、一九九四年）。

したがって天皇への国民の崇敬も、実は制度ができるのと社会的な受容との間には、おそらく半世紀近くの落差があるだろう。たとえば地方都市では、明治維新体験者が生きていた明治期を通じて、皇室より旧藩主への人々の崇敬が強かったと思われる。明治維新を記念する祭典について、近現代を通じて考える際、それを受けとめる社会自体が変化する問題を、考えさせられた。

が浮かび上がる構成であった。

さて、一本目の発表にあたる奥野久美子氏「芥川龍之介の江戸と明治——奠都五十年言説の中で——」では、「開化の良人」を中心に、芥川のいわゆる「開化期もの」が、明治五十周年を祝す「奠都五十年」言説のなかで生成されていた模様が、豊富な資料とともに確認された。「開化の良人」は、明治五十周年に文明開化をふりかえるという時代の要請の中で、「ふりかえる」行為そのものを小説にし、明治維新から大正期まで続く日本と西洋の問題を美しく浮かび上がらせた指摘する。「本多子爵」と画家の「五姓田」のモデルについても新知見が示され、芥川が「開化の良人」で「明治」を更新したさまが綿密に再現された。

続く、内藤由直氏「明治維新百年祭」が呼び起こしたものの——『大東亜戦争肯定論』と戦後価値のゆらぎ——は、一九六〇年代に、竹内好や桑原武夫の呼びかけを契機とした「明治維新百年祭」を巡るカンパニア（キャンペーン）について。百家争鳴のよう

で、五十周年の節目ごとに「明治」が更新されてきた（くりかえし）の構図

でいて、体制側による主旨のすり替えが行われたり、林房雄による大東亜肯定論が一定のポピュリズムを得るなどするなかで、戦争責任を問おうとした竹内の本意とは大きく逸脱した議論がなされ、敗戦や近代化という言葉の意味が塗り替えられ戦後価値が揺らいだと指摘する。戦争当事者が減少する現在にあって（不発に終わったことをも含め）竹内らの議論をどう引き継いでいくのか、聴講者に問われる内容であった。

シンポジウム・後半

轟原 麻美

有元伸子氏「三島由紀夫がまなざす明治——政治とエロスのあわい——」は、明治一〇〇年（一九六八）における三島の創作活動が、政治性とクイアというこれまで別々に論じられてきた二つの要素によって構成されていることを明らかにしながら、政治とエロスを語るために明治を召喚した三島の独自性を見出した発表であった。

まず明治一〇〇年における官製の演劇「ミランダ」から、近代化を寿ぐ社会に迎合しつつも日本主義を重視した三島の姿勢を示した上で、遺作「豊饒の海」では日本主義が顕著に表れており、殊に「奔馬」では神風連を下敷きにしながら男性同士の死とエロスが描かれ、その底流には明治があることを、氏は指摘した。さらに西郷隆盛がモデルとして採用されていること、そして二項対立的に思われる陽明学と男色を一身に体現した西郷を三島自身がアイコンとしていることから、クイアな側面より検討する重要性を提唱した。

会場からは、分析の上で国体とエロティシズムを結びつける必然性を問う声があった。私見としてはこのことを検討する第一段階として、林房雄や竹内好などによる西郷像と対照する必要があるのではないかと考える。

高木博志氏「明治維新五〇年、六〇年の記憶と顕彰——一九一七年、一九二八年の政治文化——」は歴史学の見地から、時代の変遷により変化してい

く（明治）の顕彰のあり方と語られ方を示した。明治維新五〇年と六〇年の差異は顕彰の主体にあり、五〇年では戊辰戦争の遺族といった戦争を知る人々が主であったが、六〇年では昭和の大札と結びつき官製主体のものとし ていったことが指摘された。明治維新六〇年以降、史跡名勝が指定されていくがその大半は明治天皇に関するものであり、郷土愛を語りながらもそれは愛国心に繋がっていくものであった。このように歴史を顕彰する一方でリアリティが失われていく要因の一つとして世代論が挙げられた。戦争を知らない世代との入れ替わりによってリアリティが希薄化していくことが明治維新六〇年の特色であるが、これは戦後七〇年の現代にも通じる問題であり、明るい面の評価ばかり抽出するのではなく、暗い面をも見る複合的な視点が求められると締め括られた。歴史の評価にはアジアにも開かれた普遍性が必要だ、という発表者の考えが明確に表れた発表であった。

質疑では明治維新五〇年においても

大陸進出などのキャンペーンと関連があるのではないかといった問いや、大札と文学の関連性について議論がなされた。

有本氏、高木氏の発表の中で「坂の上の雲」という言葉が聞かれた。近代化という雲をどう見たか、また坂の途上と登りきったその後はどうであったか。明治一五〇年を迎えた今日、一層考慮していかなければならないと、両氏の発表から改めて実感した。

シンポジウム・全体討議

横濱 雄二

全体討議では、まず各発表者がコメントを述べ、ついでフロアとの質疑が行われたが、紙幅の都合もあるため詳細は省き、おおまかな論点をまとめることとした。

第一の論点として、明治五〇年と明治一〇〇年の両年代における言説の類似性が取り上げられた。議論では、近代化の徹底をめぐる言説、さらに天皇制のあり方や、三島由紀夫・林房雄の

突出性へと話が及び、加えて武士道が近代の産物であることも指摘された。

第二に、アメリカ型資本主義が失効し、東日本大震災を経て、近代の成功体験がリアリティを失った現在、明治一五〇年を問う意味はなにか、さらに明治を問うことが近代そのものを問うことにつながるという問題提起もなされた。これと関連して、第一の論点とは逆に、それぞれの時代の差異に関する質問もあった。ともに現在の視座への問いかけであり、発表者からは、たとえば近年見られる歴史や学問の観光化・商品化の急速な進展への危惧が示されるなど、興味深い応答がなされた。

第三として、明治一〇〇年すなわち一九六八年が学生運動のただ中だったことから、下からの記憶という別の視座が必要ではないか、あるいは公的な言説に対し、私的な局面はどう捉えるべきかという質問があった。各発表者からは、男色などの江戸ブーム的なもの、竹内好における民族の感情の問題、三島由紀夫におけるクイアの

問題、世代の問題や昭和初期の大衆社会状況など、多様な切り口が提示された。また、一九六八年については、文学研究のみならず、歴史学研究でも大きな課題であることが、あわせて指摘された。

翌日の『朝日新聞』『天声人語』の話題は、明治維新一五〇周年だった。「賊軍」とされ冷遇された会津の歴史とともに、当地では戊辰戦争一五〇年の幟が立っていると紹介されていた。高木博志氏の発表で扱われた白虎隊をめぐる言説の変化への言及もあった。

もとより、日本の近代は、社会的にも領域的にも、いくつもの段階を経て構築され続けてきたものである。今回のシンポジウムでは、異なる時代と領域をめぐる発表と討議を通じ、明治一五〇年の持つ反復の側面とそれにとどまらない各時代の独自性、さらには現在から過去を問いかける歴史の視座そのものもつ広がり強く感じられ、また、決して単純な像を結ばない近代の重層性的一端を見ることができたように思われた。

ホルカ・イリナ 著

『島崎藤村ひらかれるテキスト』

メディア・他者・ジェンダー』

永渕 朋枝

本書の表紙は、読者を「旅の追体験へと誘導」したと論考にある、『藤村読本』所収の地図による。この表紙は、ルーマニアから一五年前に来日し、大学院を経て現在京都大学人文科学研究所専任講師である、著者の研究進展の旅の追体験へと読者を誘う。

第一部「メディアのなかのテキスト」は、新聞小説の挿絵・投稿雑誌『文章世界』における読まれ方・教科書における藤村に着目する。また、固定された「中央」から「地方」と「外国」を眼差さず、複眼を若い読者に提供したところに、『藤村読本』の批評性を見る。

第二部「テキストのなかの他者」は、『破戒』の翻訳における政治学・『春』における引用の力学を見る。ま

た、『新生』において、女性の手紙が「私小説」の構造をも動揺させていると論じる。

第三部「ジェンダーを攪乱するテキスト」は、『新生』の主人公が仏蘭西で体験した「他人の戦争」（第一次大戦）・「ある女の生涯」における老いと病・「嵐」における父性に注目し、これらの作品がジェンダー規範を攪乱し、その批評性が（今）も有益であると論じる。

すべて先行論文と文学理論を丁寧に踏まえた実証的な論文であるが、著者の強味が、海外における日本文学とその研究への目配りにあることは言うまでもない。最も衝撃的な論は第二部の、戦後ルーマニアで翻訳を担当した知識人の置かれた状況と『破戒』の

読まれ方である。翻訳書の「まえがき」は、社会主義ヒューマニズムの枠組みで読むことを示唆する。しかし、明治期の被差別部落民が強いられる「素性」の隠蔽や移住という最終解決法は、六〇年代後半に類似した状況に置かれていた少数民族（あるいは知識人）にあてはめられ、ねじれた形で表現される政権への批判に重ねられた。土下座して詫げる丑松の告白は社会の「罪」を暗に非難したものと読まれ、不徹底と捉えられることの多いテクニクス行きは再評価され、『破戒』には社会を（破壊）し得る意味も書き込まれていると再解釈されたというのである。

様々な時空間で読まれる文学作品の多義性、さらに文学の存在理由に、目を見開かされる書である。

（二〇一八年三月三〇日 勉強出版
四六〇〇円＋税）

紹介

浦西和彦・檀原みすず・増田周子 編著
『田辺聖子文学事典 ゆめいろ万華鏡』

重松 恵美

田辺聖子の小説全作品と、エッセイ・評論等の単行本、計五六〇項目を解説し、年譜を付した事典。五二名の執筆者による労作である。『ゆめいろ万華鏡』という美しく優しいタイトルが象徴するように、一般読者向けに楽しく読めて末永く愛読される一冊となっている。

本書は、浦西和彦『田辺聖子書誌』（一九九五年、和泉書院）および、『田辺聖子全集』全二四巻、別巻一（二〇〇四～二〇〇六年、集英社）を踏まえて編纂されたものであり、今後の田辺聖子文学研究の基礎となるべき貴重な研究資料でもある。『田辺聖子書誌』から本書の刊行まで二二年、ハンデイン一冊の事典に研究の歳月が凝縮されている。

（二〇一七年一月三日 和泉書院 三五〇〇円＋税）

本年六月の大阪府北部に起きた地震、七月の西日本を中心とした豪雨、八月九月の台風により被災された皆様、ならびにそのご家族の皆様にご心よりお見舞い申し上げます。

皆様の安全と被災地の一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

日本近代文学会関西支部

日本近代文学会関西支部会則

第一条(名称)

本会は、日本近代文学会関西支部と称する。

第二条(目的)

本会は、関西地区における日本近代文学研究にたずさわる者の相互の連絡を密にし、研究・調査活動を振興するとともに、支部会員相互の親睦をはかることを目的とする。

第三条(事業)

本会は、前条の目的を達成するために次の事業を行なう。

- 一、総会の開催。
- 二、講演会・研究発表会などの開催。
- 三、会報・パンフレットなどの刊行。
- 四、その他本会会員にとって必要と認められる事業。

第四条(会員)

本会は、日本近代文学会会員のうち、原則として関西地区に在住・在職・在学する者をもって組織する。ただし会員となる者は、事務局に届け出ることとする。

第五条(役員)

本会に次の役員を置く。

- 一、支部長 一名
運営委員 若干名
会計監査 二名
- 二、運営委員は総会における会員の互選により選出する。
- 三、支部長は、運営委員によって構成された選考委員会により候補者を選出し、総会の了承を得る。
- 四、会計監査は支部長の委嘱により総会の承認を得る。
- 五、役員の任期を次のように定める。
 - 1 役員の任期は二年とし、再任を妨げない。ただし連続して三期の選出は認めない。

2 支部長については、再任の場合はその任期を一年とし、連続して四期の選出は認めない。ただし、選任以前の役員任期を支部長任期に参入しない。

- 六、必要がある場合は、右役員以外に特別役員を置くことができる。特別役員は、運営委員会の議を経て支部長が委嘱する。

第六条(運営委員会)

本会に運営委員会を置く。また、本会の会務を円滑に遂行するため、事務局を置く。

- 一、運営委員会は支部長によって統括される。
 - 二、運営委員会は第三条に掲げた事業を立案し、それを遂行する任を負う。
- その際、必要があれば小委員会を設けることができる。
- 三、運営委員は事務局運営委員長を互選する。
 - 四、運営委員は会計担当委員を互選

する。

第七条（経費）

本会の経費は、日本近代文学学会会則別則第四の規定と、維持費による。（維持費については別に定める）

第八条（会計年度）

本会の会計年度は毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終る。

第九条（会計報告）

本会の会計報告は、会計監査の監査をうけ、幹事会の承認を得て、総会において報告する。

第十条（会則の改廃等）

本会の会則の改廃その他重要事項の決定は、総会の議決を経なければならない。

附則

一九八四（昭和五十九）年十一月十日の大会で改正承認

一九八四（昭和五十九）年四月一日にさかのほり施行

一九九六（平成八）年六月八日の大会で改正承認

一九九六（平成八）年四月一日にさかのほり施行

二〇〇二（平成十四）年六月八日の大会で改正承認

二〇〇二（平成十四）年四月一日にさかのほり施行

二〇〇三（平成十五）年十月十八日の大会で改正承認

二〇〇三（平成十五）年四月一日にさかのほり施行

二〇〇六（平成十八）年六月十日の大会で改正承認

二〇〇六（平成十八）年四月一日にさかのほり施行

二〇一三（平成二十五）年十月二十七日の大会で改正承認

二〇一四（平成二十六）年四月一日施行

*二〇一八年度役員

支部長 浅子逸男

運営委員長 木谷真紀子

運営委員 荒井真理亜 泉谷瞬

磯部敦 奥野久美子

梶尾文武 加藤邦彦

川畑和成 黒田俊太郎

斎藤理生 白方佳果

瀧本和成 田口律男

田中裕也 中谷いずみ

深町博史 福岡弘彬

増田周子 松澤俊二

三品理絵 村田好哉

山本昭宏 山本歩

最近、支部会員の皆様が刊行された書籍の事務局への献本が減っております。ご著書を刊行された方は、裏表紙「事務局便り」をご参照の上、ぜひ事務局にご献本ください。

事務局便り

○ 献本のお願ひ

本会報では、支部会員の皆様が刊行された書籍を対象とする書評欄を設置しております。事務局では、書評を希望される書籍を随時受け付けております。左記の要領でぜひお送りください。

● 対象となる書籍：支部会員の学術的な刊行物で、単著、あるいは支部会員が関わって刊行された書籍。

● 送付先：関西支部事務局

※なお、書評欄への掲載の採否および書評者の人選については、関西支部運営委員会にご一任ください。

○ 維持会費納入のお願ひ

維持会費の納入がたいへん少ない状況です。同封の振込用紙で、ご協力のほど、何卒よろしくお願ひします。

○ 関西支部二〇一八年度役員

浅子逸男（支部長） 木谷真紀子（運営委員長） 荒井真理亜 泉谷瞬 磯部敦 奥野久美子 梶尾文武
加藤邦彦 川畑和成 黒田俊太郎 斎藤理生 白方佳果 瀧本和成 田口律男 田中裕也 中谷いずみ
深町博史 福岡弘彬 増田周子 松澤俊二 三品理絵 村田好哉 山本昭宏 山本歩

○ 日本近代文学会関西支部事務局

〒 602 | 8580 京都市上京区今出川通烏丸東入 同志社大学 日本語・日本文化教育センター 弘風館505

木谷真紀子 個人研究室内